

書評

佐藤繁好編『日本のプーシキン書誌』

ナウカ株式会社, 1999 年, 263 頁+図版 3 頁

藻 利 佳 彦

文献目録と年譜作りは作家研究の第一歩とよく言われる。テキスト分析が研究の本質的部分を成すことは間違いないが、研究対象とするテキストの確定や第一次資料の選定作業を多少なりと進めれば、結果として各研究者独自の文献目録や年譜を生み出してゆくことになる。それは個々の研究者が先行研究をどのように把握し理解したかを示すと同時に、時としてその研究水準をも決定する。しかし、目録にしても、年譜にしてもそれなりに整理して独立した形を与えらるとなると、実際には容易なことではない。本書はその容易ならざる仕事の一つ、日本におけるプーシキン関連文献目録作成という作業に、生誕 200 年を記念し一応の区切りをつける形で刊行されたものである。

編者は、もともと「自家用に作っていた情報を、ひとり占めするのなんだから公開する」ことに決め、まずナウカの『窓』にこの仕事の最初の作業を発表している。整然と並べられた文献一覧が載った号が出るたびに、その資料は、プーシキン研究者だけでなく、比較文学や日露交流史を研究するひとたちからも注目され、話題になった。読者から遺漏の指摘や資料提供も行われている。次に編者は日本プーシキン学会の会報として、本書の前身とも呼ぶべき労作を公表した。会報としては異例の分厚い号はすでに、本書と資料収集の最終年限が異なるだけの立派な文献目録であった。残念ながら、わずかな限定部数で発行されたこの号は、関心を持つすべてのひとの手に

送り届けることはできなかったようである。このたびようやく多くのひとが利用できるようになった本書は、編者の 15 年に亘る地道な努力の賜物である。

本書は、ただ年代順に文献を並べただけの文献目録ではない。おそらく作業開始当初から、編者はすでにそのような私家版レベルの自己満足的な目録作りの姿勢を排してきたのであろう。逆にこの文献目録は、司書という編者の職業がもたらす専門的な知識によって、徹底的に利用者の便を考えて、あらゆる角度からの検索が可能なように工夫され、詳細な索引が付されているのである。作品名から関連文献を知ることでもできれば、著者名からその人物の発表文献を探ることもできる。プーシキンのどの作品も、日本語（河出書房新社版「プーシキン全集」）とロシア語（アカデミヤ版「大プーシキン全集」）の現在定本と呼べる全集中での所在が直ぐわかるように番号が振られている。またなかなか手にとって見ることのできない 1955 年頃までの文献には、内容の一部が書き抜かれて添えられており、その文献の香りを伝えてくれる。利用者にとっては、まさに至れり尽せりの配慮がなされている。本書は、書誌作りの一つの典型的な例としても大いに参考にすべき点をたくさん含んでいる。

本書によって、日本におけるプーシキン受容の研究は大きく前進する素地が作られたといっても過言ではなかろう。しかし、どのような目録にも手違いや遺漏は避けが

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

たく、この文献目録にも残念ながら不十分な点はある。一例を挙げれば、この書誌の最初に置かれた『露国奇聞花心蝶思録』のデータのなかで、「月岡芳月の筆になる挿絵4葉」という個所には少々問題がある。まず、「月岡芳月」は「月岡芳年」とするか単に「芳年」、あるいは改題再版された『露国情史スミス・マリー之伝』を考慮して「大蘇芳年」と記すべきであろう。また「挿絵4葉」についても、データが「国立国会図書館蔵本」からとられたことを示してはいるものの、そしてそれが事実であることは間違いの無いことなのだが、他に早稲田大学柳田文庫所蔵のものがあることは明記しておくべきだろう。なぜなら、柳田文庫所蔵の『露国奇聞花心蝶思録』には6葉の挿絵があり、それらは枚数も入れられている個所も『露国情史スミス・マリー之伝』と同じだからである。現在記載されている書誌データだけからこの二つの本を比

べてみると、改題再版された『露国情史スミス・マリー之伝』において2葉の挿絵が加えられたと考えられる危険性を残すからである。もちろんこのような危険性は、研究者自身が自ら本を手に取り確認するという基本的な作業を怠らなければ避けられるものではあるが、なかなか手に取って見る機会の少ない本だけに、こうした事実の記載は他のどの情報にもまして重要と思われる。この書誌のレベルの高さに鑑みて、敢えて苦言を呈する次第である。

ロシアでは、すでに久しく集団的な作業としてプーシキン関連の文献整理が行われてきたが、その基となったのは、オットー・オネーギンの蔵書整理とともに本格化していったモザレフスキイ個人の目録作成作業である。そのことを思えば、本書はまさに日本におけるプーシキン関連文献整理の最初の基となるべき書と言えよう。

(もうり よしひこ・東京ロシア語学院)

川崎浹著『「英雄」たちのロシア』

岩波書店, 1999年, 500頁

沼 野 充 義

『「英雄」たちのロシア』は川崎浹氏のこれまでの仕事の集大成であり、ここには膨大な素材が惜しげもなく盛り込まれている。特に1980年代末以来数多くの作家や社会活動家と会い、現代ロシアの「現場」に何度も足を運ぶことによって次々に著書をまとめてきた川崎氏の精力的な仕事ぶりには、目をみはらされるものがあつたが、それら一連の著作は時事的な動きに密着しすぎていて、それが長所であると同時に、限界ともなっていた。しかし、本書は、これまでの著書をすべて総合し、素材を再利用しな

がら、対象から批評的距離を置いて「物語＝歴史」を織り直そうとした試みになっている。

最初に構成をごく簡単に眺めておくと、1970年代パリの「亡命ロシア王国」についての序章を導入として、叙述は何人かの作家や知識人をめぐって、螺旋を描くように、しかしほぼ経時的に進んで行き、1960年代のソ連に始まり最後は1998年の現代ロシアに至る。取り上げられる人物は、ソルジェニーツィンの他に、ブコフスキイ、リモーノフ、マクシーモフ、シニャフスキ